

能登林業学校

ー能登町における森林の新しい価値の創出ー

Keywords

能登町 林業 あばれ祭り
櫓 屋根



DZ22715 北川信太郎

1. 研究背景

私は2025年7月、「のど復興留学」に参加し、能登町宇出津に7日間滞在した。滞在中は、あばれ祭りの運営や復興ボランティアに携わり、祭礼を支える町民一人ひとりの地道な努力と、町外から訪れるボランティア、いわゆる関係人口の協力が重なり合うことで、あばれ祭りという大きな伝統行事が成立している現場を体感した。個々の力が集積され、ひとつの大きな祭礼として結実するその姿は、能登町の地域構造そのものを象徴しているように感じられた。

特に印象的であったのは、林業者の存在である。あばれ祭りに欠かせない松明の制作を担うだけでなく、町民をまとめ、祭礼の基盤を支える役割を果たしていた。祭りの背景には、森林資源を扱う林業と、地域の人々との強い結びつきが存在していることを実感した。この経験から、あばれ祭りをはじめとする能登町の文化や共同体が今後も持続的に存続していくためには、能登町の林業そのものを再構築し、人々の生活を支える街の産業基盤となる必要があるのではないかと考える。



写真1 あばれ祭り



写真2 ボランティアの様子

2. 研究内容

2.1 能登町の林業を再構築する意義

2024年の能登半島地震と能登半島豪雨では土砂崩れなどの山林被害が多く見られ、人々のライフラインを遮断した。林業を再構築することは、そのような災害時の山林被害の抑制に加え、里山の森林資源を未来へ継承すること、さらには地域文化や祭礼を後世に伝えていくことにも直結している。また、カーボンニュートラルが求められる現代において、森林資源を介した都市部との新たな関係構築は、能登町にとって重要な可能性を持つ。

2.2 能登町の林業の現状

能登の森林面積約14万haでそのうち人工林は約半分に相当する7万2千haである。そのほとんどは戦後の拡大造林期に植えられた人工林である。日本全国で問題視されている林業者の高齢化、担い手不足、などは能登町も例外ではない上、2024年の2つの自然災害によって問題は予想を超えた勢いで加速している。

2025年夏季時点では山林被害により林道が封鎖され特殊伐採者（住宅地・道路沿い・神社仏閣・急斜面など、危険や制約がある場所で行う伐採作業を行う）しか伐採作業ができない状態であった。

そのため伐採量が大幅に減少し、能登木材総合センターの年間の取扱量は2024年の2万4397m³から2024年は1万1310m³と半減した。これからは石川県の取り組みとして伐採量の拡大、施設整備等の体制強化などの目標を掲げている。

2.3 林業の6次化

能登町には個人事業主の特殊伐採者（住宅地・道路沿い・神社仏閣・急斜面など、危険や制約がある場所で行う伐採作業を行う）で構成される木こりチームが活動しており、滞在時彼らと能登町での林業の未来などについて話した。話の中で能登町の林業を6次化することへのハードルの高さを実感した。依頼された伐採作業を行えば家族を養うには十分な収入が得られる彼らにとって林業を6次化することに実際モチベーションは無いと感じた。

2.4 考察

こうした状況の中で、これからは能登が本来有してきた豊かな自然環境、特に森林資源に改めて目を向け、林業や木材産業を軸とした地域の再構築を図ることが能登の産業の再発展、人々の暮らし、繋いできた伝統文化を守ることにつながる。加えて都市部で活発になる建築の木造化を材料供給地として支える役割を担えるようになると思う。そのためには資源循環の仕組みを持続的に支える人材と技術の育成が急務となっている。

3. 設計敷地

設計対象地は石川県鳳至郡能登町藤波地区の台地である。現在、当該地には建設会社事務所が立地している。



敷地周辺図

3.1 地形と歴史

能登町は山頂が平坦な段丘状の地形（準平原）であり、敷地部分は5つある段丘の最も低い遠島山段丘面（海拔30~40mの位置）に位置している。周辺は東方向が水田、他3方向がスギ植林に囲まれた自然豊かな場所である。

歴史的には当敷地はかつて宇出津の消防組（終戦まで灯火管制や空襲管制、避難訓練等国民防空の先頭の役割を果たした）が設置されていた場である。

4. 設計概要

卒業設計では当敷地に林業学校を設計する。石川県内には森林分野に限らず、建築・地域経営など分野を横断するカリキュラムを通じて、幅広い視点（林業の6次化）を林業に向けられる新たな人材を学校教育のなかで育成し、能登町における林業と建築の関係の透明化を目指す必要があると考える。

現在、石川県内には金沢林業大学校が1校ある。しかし金沢林業大学校は学校施設を所有しておらず金沢林業大学校の事務局が金沢森林組合に間借りしている状況である。これから県産材の利用が進められていく中で、木材を扱える設計者、施工者、そして川上である林業にまで精通している人材を育成するため設備が充実した林業学校を設計する必要がある。

4.1 設計主旨

スギが植林された斜面に囲まれた敷地と学校をどのように馴染ませるかを考えている中で、宇出津の住宅の黒瓦の集合と富山湾や山といった自然が溶け込んでいる様子を思い浮かべ、林業学校に「屋根の集合」の要素を持たせた。それぞれのプログラムを分棟に配置し、平屋にすることで森林に囲まれた敷地を自然に歩き回れるような配置計画とした。

3.1に記載したように敷地には消防組が設置されていた過去があり周辺集落を見渡せる物見櫓があったと推測できる。その推測から林業学校にも櫓を設置し学校全体に

象徴性を持たせるとともに学校全体に空間的な秩序を持たせた。



写真3 鳥瞰模型写真

4.2 プログラム

- ・延べ床面積 約2100㎡
- 講義室 約58㎡
- 講義室 約58㎡
- 学生ラウンジ 約45㎡
- PC実習室（シュミレーター室含む） 約80㎡
- 展示室（櫓部分） 約250㎡
- 医務室 約20㎡
- 講師室（資料室含む） 約97㎡
- アトリエ 約125㎡
- 倉庫 約54㎡
- 更衣室 約98㎡
- 全天候型実習室 約400㎡
- アスレチックジム 約200㎡
- 図書室（自習室含む） 約475㎡
- 宿泊室 約20㎡ 2部屋
- 約26.5㎡ 1部屋
- トイレ 約16.5㎡
- 櫓展望デッキ 約53㎡

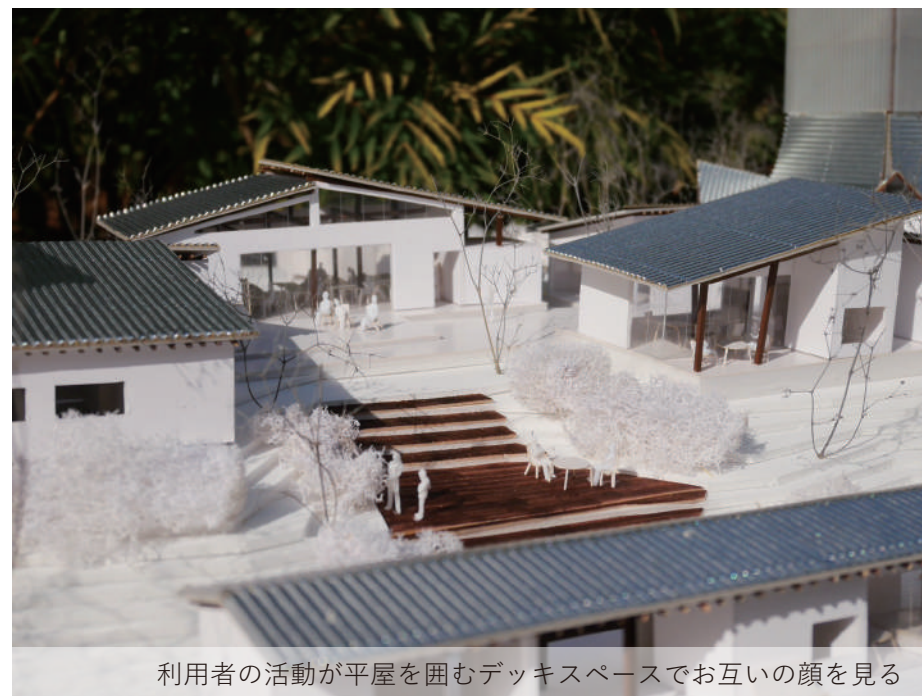
参考文献

- 1) 田中菜月.” 能登町の森と祭りを支える木こりチームGOEN”. 響hibiki-ki. 2025年3月31日. 響hibi-ki | 能登町の森と祭りを支える木こりチームGOEN, 2025年12月13日閲覧
- 2) 石川県農林水産部森林管理課.” 石川の森林・林業・木材産業”. <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/shinrin/documents/ishikawanoshinrinringyoumokuzaishangyoupannhuretto.pdf> (2025年12月14日閲覧)
- 3) テレビ金沢.” 【解説】“能登の木材” 地震・豪雨で例年の半分に 能登半島の林業の現状 復活のカギは…” . テレ金NEWS NNN. 2025 年 2 月 28 日 . <https://news.ntv.co.jp/n/ktk/category/society/kt16d7740630e2429887c026551c6b4625> , 2025年1月4日 .

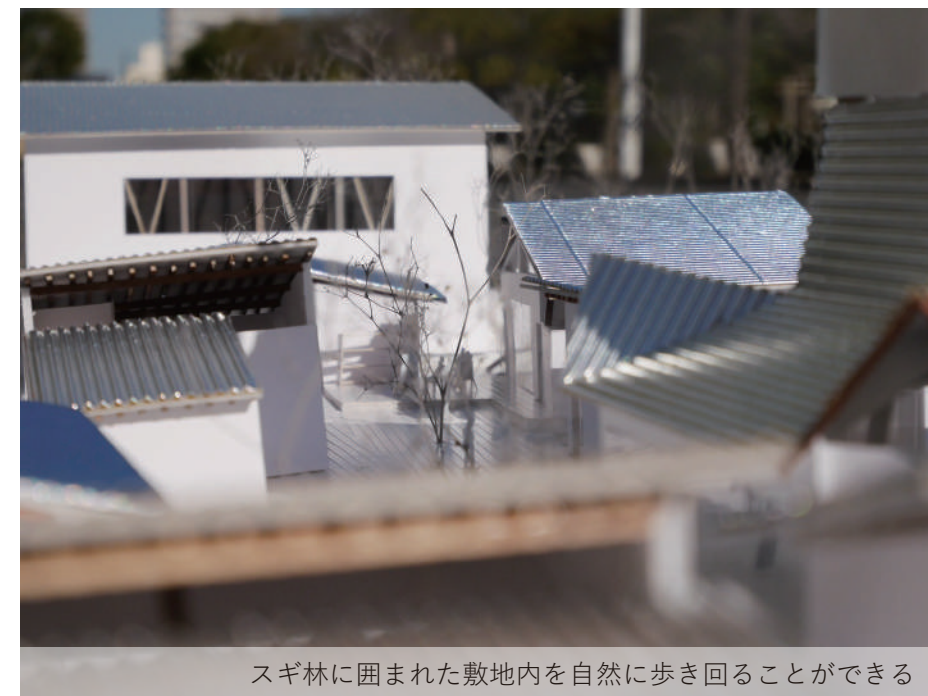
林業学校での活動の様子



櫓が中心にあることで全体に秩序が生まれる



利用者の活動が平屋を囲むデッキスペースでお互いの顔を見る



スギ林に囲まれた敷地内を自然に歩き回ることができる



実習室の外での活動



櫓四隅ドーマー窓から展示室に採光を入れる



講師たちがデッキで雑談中



移動の時に見える風景、遠景には櫓とスギ林